

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 沖縄文化とパーソナリティ研究 - 沖縄人間学の素描

|      |   |
|------|---|
| 著者   | 比嘉 佑典   |
| 著者別名 | HIGA Yuten  |
| 雑誌名  | アジア・アフリカ文化研究所研究年報   |
| 巻    | 21  |
| ページ  | 35-47   |
| 発行年  | 1986  |
| URL  | <a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00010209/">http://id.nii.ac.jp/1060/00010209/</a> |

## 沖繩文化とパーソナリティー研究

### 〈沖繩人間学〉の素描

比 嘉 佑 典

#### 一、私の中の「沖繩人」

島を離れ東京で暮らして間もない頃、あらためて自分がウチナンチュ（沖繩人）だということをしみじみと知らされたことがある。

あわただしい朝の出勤時、バス停へいそいでいた時のことである。島の民謡「谷茶前」<sup>タニチャマイ</sup>がどこの家からもなく聞えてくるのにハッと私は、呼び止められるようにその場に立ち止まってしまった。民謡の調べは、眠っていた私の胸をいつしかゆさぶりおこしていた。なつかしさのあまり、胸に熱いものがこみあげてくるのをおさえることができなかった。気がついてみると、私はその場にすっかりくぎづけになっていた。その時、私は心底沖繩人だ<sup>ウチナンチュ</sup>ということをつくづく思い知らされたものである<sup>(1)</sup>。

独身時代は、毎年沖繩に帰った。どんなことがあっても帰った。別にこれといった用事はないのだ。無性に帰りたいかった。島が私を呼んでいるとさえ思った。これは一種のホームシックだと、苦笑しながらも帰った。島に帰って何をするというわけでもない。ただぶらぶらするだけで心がやす

らいだ。ほっとした。島は私にとって、いわば〈肉親〉のようなものであった。島は、私の中の「源郷意識」をゆさぶるのであった。

そのことは、私にかぎったことではない。沖繩の子供達が、本土に集団就職する場合、きわめて定着率が悪いといわれる。本土社会にうまく適応できずに帰島する。その忍耐のなさを悪評される。沖繩社会の甘えだとかたづけられる。私にいわせると、これは文化の問題だと思う。南方へ移民でいった人々の、島に焦がれるあの「南洋小唄」は、聞く人の胸をしめつける。何故か、やはり「情の島」の引力だろう。いつてみれば、それは〈シマ社会の文化〉の問題である。

「本土復帰したら、沖繩も東北や九州南の県と同様、日本一の過疎県になる」と断言したゼミの教授がいた。私は即座に「ならない」と反論した。「なぜだ」という問に、私は「沖繩は一つの国だからです。」といったら、「信じられない」と言いつつも、かさねて「全国的傾向からして過疎になる、沖繩も例外ではない」と断言された。しかし、復帰後は、逆に人口が十万人余ふえた。本土からの国家公務員、商社マン、自衛官等でふくらん

なのである。失業率日本一、日本一最低の国民所得県であるにもかかわらず、人々は島を出ようとはしない。人口密度は世界一である。そのことは現在も一向に変わっていない。一体どういことだろう。それは、経済問題だけでははかれない文化の問題だと私は思っている。

私は、結婚して大和奥さんをもらった。沖繩では、本土の女性をもらうと「大和奥さん」と呼んでいる。身内の者が第一に心配したのは「食事は大丈夫か」である。食文化を気にしているのだ。食事は生命にかかわるので言うまでもないが、そのことだけでも、私に異文化を感じさせる。結婚後の生活習慣、親戚付合、諸行事、言語表現（特に感嘆詞や言い回し等）などの文化の違いは、否応なしに意識させられた。特にお葬式においてはなおさらである。仏教式は、沖繩の部落葬とは根本的に異なるし、お墓の外形もわかりである。人間の生死の問題は、信仰と関係深く沖繩の場合は、「祖先崇拜」「始祖求心」的信仰を生み出している。

私はまぎれもなく日本人である。日本人でありながら日本人でない違和感をいだく時、私の中にもう一人の自分（沖繩人）に出会うのである。私の中に、おそらくは「日本人Ⅱ日本文化」と「沖繩人Ⅱ沖繩文化」の部分が混在していて、そのことが私をして「大和人」「沖繩人」意識を形成しているものと思われる。

ところで、「沖繩人」という郷土的性格は、ひとり沖繩だけのものではない。薩摩人、肥後人、長州人だって存在したし、広くいえば九州人、関西人、東北人といった広域的な呼び名もある。逆に、地方特有の気質で呼ぶ場合もある。たとえば、会津っぼう、水戸っぼう、土佐の「いごっそう」、肥後の「もっこす」等がそうである。

こうしてみると、住む地域によって、人間の地域（郷土）的性格（気質）が異なってくる。おそらくは、こうした地域的性格の集合体が、日本国民をつくっているのだろう。国民性とか日本人の性格特性はと問われると、私自身これだといきれない。何かあいまいで際立ってこれだというものはない。きわめて抽象的なのである。

それにくらべ地域的性格は、その地域の風土・歴史・文化や地域社会に土着しているので、その性格はおのずからはっきりあらわれてくる。沖繩の場合は、他の地域的性格と比較して最も色濃く残っており、文化の異質性において際立っていると見える。たとえば、『ヤマト文化と琉球文化』の著者である下野敏見によれば、日本列島を文化的視点で見れば、ヤマト文化圏と琉球文化圏の違いがあり、その二つの文化圏の境界はトカラ列島（鹿児島と奄美大島の間の島々）であるという。そこは、二つの文化の「裂け目」としてとらえている。

小野重朗にしてもそうである。彼は『神々の原郷——南島の基層文化——』<sup>(3)</sup>で下野氏と同じようなことを言っている。つまり、奄美を境界線として北に本土文化、南に南島文化（琉球王朝文化）圏に二分され、奄美はこれら両文化圏の「深い谷間」になっていると指摘している。

そのことからわかるように、文化的比重からすると、沖繩はひとつの文化国家であり、かつては「琉球王国」としての国の歴史を歩んでいる。こうした異文化的地域の中で、沖繩人的性格がいかに形成されるのかを、特に文化とパーソナリティとの関係でとらえてみようと思う。

「文化はデリケートな生き物である。そして文化は個性をもつ。……文化は一つの有機体としか言いようのない何ものかである。」<sup>(4)</sup>とする源了圓に

いわせると、「文化は、その中で自己を形成した人物のものの感じ方、もの  
の考え方、そして行為の仕方、一言で言えば『生き方』において自己をあら  
わにする」という。そうであるならば、私は自己を生み出したシマ社会  
・歴史を主体的にとらえかえす自覚的課題をもって、もう一度〈沖繩人〉  
を「文化ノ相ノモトニ」とらえてみたいと思うのである。

## 二、「沖繩学」から「沖繩人間学」へ

このように考えると、文化とパーソナリティー研究で重要なことは、パ  
ーソナリティーの側から文化をとらえる視点である。このようなパーソナ  
リティー研究としての「沖繩人」研究を、沖繩文化人類学といわずに〈沖  
繩人間学〉と呼びたいと思う。

では、沖繩人間学とは何か。ひとことでは、沖繩の主体性の学であ  
る。その学は、主体性を「文化ノ相ノモトニ」にみることであり、それは  
文化とパーソナリティーの関係によって創出される主体性の学といってよ  
いだろう。そう定義してみると、従来の「沖繩学」だけではなく、人間の  
学としての沖繩学を構想する必要がある。

ここで、従来の沖繩学について若干ふれておきたいと思う。

沖繩学が、台頭しはじめのは江戸時代である。大和と沖繩の関係が深  
まるにつれて、大和の学者、知識人が沖繩に関心をよせるようになった。  
たとえば、「荻生徂徠『琉琉聘使記』(一七一〇年)、新井白石『琉球国事  
略』(一七一一年)、『南島志』(一七一九年)、森島中良『琉球談』(一七九  
〇年)、滝沢馬琴『椿説弓張月』(一八一〇年)、尾代弘賢『琉球状』(一八  
三二年)など」である。彼らはいずれも、直接沖繩へ渡り現地を見聞した

のではなく、沖繩についての資料を入手して、沖繩研究を行ったのであ  
た。

沖繩学が、研究史上注目を集めるのは、明治になってからである。特に  
その時期は、本土から研究者が島に渡り、現地の状況を調査することが盛  
んになった。いわば沖繩学の黎明期である。

沖繩が脚光をあびるのは、大正期に入ってからである。大正十年の柳田  
国男の沖繩入り、折口信夫の沖繩調査(大正十年、十二年)によって、内  
外の研究者を刺激し、沖繩学は頂点に達する。沖繩からは、沖繩学の父と  
いわれる伊波普猷をはじめ、比嘉春潮、宮良当壮、金城朝永、島袋源七等  
多数の研究者を輩出している。

この時期の沖繩研究の視角は、現在(当時)の沖繩が日本文化の原初的  
形態をたずねるうえに、有力な資料を蔵するものとして注目された点であ  
る。つまり沖繩文化が、日本文化の基層をなしているという考え方であっ  
た。民俗学を中心とするこの種の沖繩研究の成果は、おびただしい量にの  
ぼっている。

戦後の沖繩学は、後述するように外国人学者による占領政策上からの研  
究と、日本人学者間では戦前に引き続き民俗文化研究を踏襲する方向で開  
始された。

現在では、「これまでの沖繩研究が、民俗文化を民俗文化として把握する  
にとどまっていたのに対して、これが現実のシマ社会において果たしてい  
る民俗文化各要素の社会的な機能連関を握りしめようとする試みもなされて  
きている。むしろ、このような志向が、現在の方向を示しているといえよ  
う」。

このように、沖繩学は民俗文化研究の大道を歩み、膨大な研究業績をあげるが、他方では「沖繩はもはや民俗学者の餌食ではない」という皮肉や、沖繩は民俗学者たちの「愛玩県」ではないと批判されるようになった。

批判者側の言い分は、沖繩の古い文化に注目するあまり、沖繩のきびしい現実に目を塞いでいることに不満を抱いていたからである。学問の性格上しかたのないことだとはいっても、古い文化が現実の実生活の中でどのように呼吸し生き続けているのかを確かめない沖繩研究者は、文化の古道具あさりといわれてもしかたがない一面もあったといえよう。事実、沖繩問題はほとんどが「文化問題」であるという認識が、沖繩学に希薄であったのではないかと思われる。

しかも、沖繩文化が日本文化（本土文化）の基層をなすので、沖繩を日本文化の原初的形態として研究することは、本土の側の研究者にとっては重要な観点であるかもしれないが、沖繩の民衆自身にとっては、こうした視点のみで沖繩を把握することに疑問があり、とりわけ沖繩の主体性の究明に関しては限界があるといえるだろう。

沖繩の民俗文化が、単に文化財として保存されるのか、それとも現実のシマ社会に生きて機能しているのか（文化の生命）の問題は、今日の沖繩学でも重要なテーマになっており、前述したように、文化をシマ社会の機能的連関で把握しようとする方向にきていることは百歩も前進だといつてよいだろう。

こうした研究をふまえて、文化とパーソナリティー研究は、研究的必然性をもっており、シマ社会に住む人間、つまり沖繩人の（主体性）との関連で、沖繩文化をとらえなおすことが重要である。そのためには、（沖繩

人間学）的立場からの研究が要求されているといつてよいだろう。

### 三、「沖繩問題」を「文化問題」として把握する視点

沖繩人間学としての文化研究を試みる場合決定的に重要なことは、沖繩の政治・社会的問題を「文化ノ相ノモトニ」見るということである。つまり、沖繩問題を文化問題として把握する視点である。

私は、歴史的に沖繩が政治の舞台で行われた中国との関係、薩摩との関係、明治政府との関係、米占領軍政との関係の中で、相手側がとった策政のすべてが、沖繩文化とかわる内容であり、文化問題として沖繩問題をとらえることを以前から主張しているひとりである。

民主主義ということをもう一度考えるために沖繩へ行った大江健三郎は、政治問題としての沖繩に強いインパクトを受けているが、その後の彼の沖繩認識が、文化問題としての沖繩問題に変化していることに、私は当然の帰結だと思っている。大江氏は、次のように語っている。

政治問題あるいは社会問題として沖繩をとらえたけれども、もっと大きく文化問題として沖繩を受け止め、それを日本人である自分自身の文化問題に突き合わせるということをわれわれはしなかった。その点で、あの沖繩闘争に参加することが日本人をつくり変えるためにはあまり役に立たなかったのではないかという気持ちを持っているのです。

しかし、核兵器の問題も含めて、沖繩の基地の問題は現に生きている。今後も、それに沖繩、本土が一緒になって参加していく必要があるわけです。その場合に、今度こそ文化問題として沖繩全体をとらえることを若い人に望みたい。そうすれば、沖繩という問題、あるいは日本批判、

日本人を見直すという問題も、もっと深い根のある問題となると思いません。

共同体の言葉を個人のなかにどう取り入れるか、あるいは個人の言葉を共同体の言葉にどのように開いていくか、そのダイナミズムが人間の文化であって、そのような側面から社会、世界、人間をとらえることが、社会、世界、人間を文化問題としてとらえるということだと思います。私は、あらためていま沖繩問題を文化問題としてとらえることを考えなければならぬと考えるのであります。<sup>(8)</sup>

沖繩出身の芥川賞作家大城立裕は、沖繩問題を文化問題だと一貫して主張しているひとりである。その彼が、日教組第二七次・日高教第二四次教育研究全国集会（一九七八年）で特別講演をしているが、彼の次の言葉に注目してみよう。

戦後三〇年間沖繩問題というものが流れてきたわけではありますが、それがほとんど政治的なアプローチだけに終始しておりました。私は、ここ二〇年ほど前から、沖繩問題は文化問題だと自分で考えておりました。その間にも、復帰運動がほとんど政治問題だけで理解されていた。そして、沖繩研究がたとえば民俗学という分野でなされるのを見て、復帰運動の指導者の一人が「沖繩はもはや民俗学者の餌食ではない」と申しまして、ある民俗学者をひんしゅくさせたものであります。それが、ほぼ一〇年前のことにすぎないのであります。その発言の裏には明治以来の沖繩の苦悩が刻み込まれているわけですが、それにしても、沖繩問題が文化問題を抜きにしては考えられないということに気づくのがあまりに

も遅すぎたと私は思っております。

……沖繩問題は文化的にアプローチしなければならぬと世間一般に感じられたのは復帰の直前からありますが、その感じられるゆえんは、沖繩の人と本土の人と一緒に仕事をしているとどうもリズムが違うということから発想されたようであります。生活のしかたにおいて、何か発想法が違うんじゃないか。<sup>(9)</sup>

かつては、本土の学者、研究者が沖繩に直接きて調査し、文化の特異性に注目した。

今度は復帰を前後して、大城氏が指摘するように、多数の一般人が仕事のために沖繩にやってきて生活するようになった。実際に沖繩で生活してみても、いろいろな面で「異文化」を感じているのである。かつて私（筆者）が本土の生活で感じた他文化と自文化を、今度は本土の人々が沖繩で他文化と自文化に出会っているのである。共に顔をつき合わせて生活してみると、「生活文化ノ相ノモトニ」において沖繩のパーソナリティーを肌身で知ることができらるだろう。

沖繩問題を「文化ノ相ノモトニ」とらえると、前述したように沖繩は文化的には、一民族・国家いわゆる文化国家であると言っても過言ではない。また、ソシユールの言う「民族（nation）を作るのはだいたいにおいて言語である。民族的単位（unité ethnique）を作り出すものは、ある程度まで言語の共通性である」という観点からしても、琉球語＝沖繩方言は、大和語と異なった一種の民族言語であると同時に、『おもろそうし』にみられるように文化言語としての固有性をもっている。

沖繩問題は、このように文化問題としてとらえないと問題の本質がつかめない。「文化ノ相ノモトニ」問題をとらえることは、沖繩の主体性を究明する（沖繩人間学）研究の重要なキーポイントである。

#### 四、沖繩文化の文化的特質の把握

沖繩人間学を考えるうえで、重要なことをもう一つ指摘しておきたいと思う。それは、大和（本土）文化と沖繩文化との特異性の問題である。

そのことを説明するには、増田義郎の話しが説得的である。増田氏は、「日本人の好奇心とエネルギーの源泉」と題する座談会（上山春平、江上波夫、増田義郎）で、日本の文化的特性といべきものを、うまく表現しているので、氏の見解をみてみよう。

外からの文化を受け取るというようなことは、いろんな文化と接触している民族なら大なり小なりやることだと思うのですが、ごく最近の時代を除くとしても、これまでの歴史において一つの文化集団がほかの文化集団から影響を受ける場合、平和的になんとはなし文化が伝播するといえるのではなく、必ず征服・侵略といった軍事行為がまつわりついている場合が多い。たとえばアングロ・サクソンのイギリスにラテン文化の基礎をもたらした、あるいは封建制をもたらしたといわれるノーマン・コンクエストですが、たしかにそのおかげでもたらされたものも多いけれども、同時にアングロ・サクソン人は実にひどい目にあっているのです。

世界的に見ると、高い文化が他の地域に伝わっていく場合、そういう征服・侵略に伴って行なわれたのが、むしろ常態だろうと思います。と

ころが日本の文化は、征服などとは無関係に、高文化からその時々さまざまないいものをいただいている珍しい例です。世界の大勢は、外来文化を受けるといことが、外来文化のきらびやかなものとか思想を受けるといことだけでなく、そういうものを作り上げた民族なり政治集団なりが直接に乗り込んできて、その社会を攪乱するという事態とつねに結びついている。ですから、もたらされたものがどんなに魅力的な外来文化であっても、いつも素直には受けとめられない。つまり外来文化の流入には、宿命的にその裏には警戒すべき条件が抱き合わせになつているという一種の不安感みたいなものがあるのではないか。しかし日本の場合は、その歴史的条件から、征服なしに、しかも外国人と切り離して、外国の物や思想だけが抽象化された形で入ってきましたから、そういう警戒心や恐怖の感覚はいっさいない。日本人が外来文化に対して旺盛な好奇心をもち、それがすぐ模倣に結びつくというのは、そのへんに根本的な理由があるのではないかということを私は考えているわけ（註）です。

増田氏の指摘するように、日本（本土）文化自体は文化的な征服・侵略などほとんど受けておらず、順風文化の歴史を歩んでいる。それに対し沖繩文化の場合は、他の諸外国の場合と同様である。外来文化の侵入のたびに、その背後に警戒すべき条件が抱き合わさっており、不安と警戒心をいだかされている。

たとえば、薩摩の琉球侵略、琉球処分、明治政府、天皇制下、軍国主義体制下での「文化的同化政策」等は、沖繩文化に大きな打撃を与えた。日

本土の政策が一貫して沖縄文化の否定にあったことは説明するまでもない。さらに、「ヤマト世」から「アメリカ世」に変わることによって、アメリカ文化とのカルチュラル・ショックを経験すると同時に、政治的には異民族支配による軍事政権下で屈辱を受ける結果になったのである。

このように沖縄文化の歴史的経緯をみてくると、沖縄文化はいわば乱気流的文化であり、外来文化の渦潮の中で、文化的支配をせまられるという状況におかれている。それはいつてみれば、沖縄の主体性がゆさぶられるというきびしい状況に常におかれていたということの意味するのである。

そのことが、本土文化と沖縄文化との決定的な相違である。沖縄の場合は、他国の文化との衝突があり、そのたびに沖縄の「主体性」が危機にさらされてきた。おそらくは、沖縄人特有の〈先祖返り〉＝祖先志向性（根源志向性）、シマ意識および強烈な原郷意識は、こうした文化的危機の中で自らのアイデンティティの確立をそのことに求めたのではなからうか。

ともあれ、文化とパーソナリティ研究にとって、文化自体のもっている独自性・体質の究明は重要な課題である。主体性の学としての沖縄人問学の〈ヘキーストン（要石）〉である。

## 五、沖縄人間学研究のフレームワーク

沖縄のパーソナリティを「文化ノ相ノモトニ」みる、沖縄人間学研究の枠組を示しておきたい。研究方法的にどのような視点が考えられるのか、おおざっぱに粗描してみたいと思う。

### (1) 文化問題史的研究

そのことは、沖縄の政治・社会問題を文化問題として把握し、文化問題

の歴史的究明において沖縄の主体性をとらえていくという研究方法である。そのためには、文化問題史的観点から仮説的に次のような時代区分をする必要がある。

① 琉球人時代——中国をはじめ極東全域と貿易を営んでいた時代（琉球王朝時代）

② 属領人時代——薩摩の琉球侵入の時代（搾取時代）

③ 第一県民時代——廃藩置県後から戦時下までの〈大和世時代〉

④ 殖民的時代——米国軍政下の異民族支配の時代（アメリカ世時代）

〈琉球政府時代〉

⑤ 第二県民時代——沖縄返還・本土復帰以後の時代

以上おおまかに区分すると五つの時期に分けることができるが、各時代の文化状況を簡単に説明しておく。

〈琉球人時代〉

その時代は、勇猛果敢で、沖縄の主体性が開花した時代である。琉球人は四海を股にかけ、中国、大和、朝鮮、安南、シャム、パタン、マラッカ、ジャバ、ルソン、ボルネオ、スマトラ等の極東全域と貿易を営み、海洋民族として勇敢闊達で自主独立の精神の旺盛な時代である。〈海人〉のロマン、つまり海洋民族の冒険心は、四海に充満していた。その反面、琉球人は温和で非好戦的な性格の持主でもあったといわれている。

貿易の道は文化のシルクロードであり、四海の文化を集めて「琉球文化国家」を築いたのである。中国へは〈進貢船〉をくり出し貿易を盛んにし、また官生と呼ばれる留学生を送るなどして親密な交流を行った。さらには、琉球国・中山王に対し中国は〈冊封使〉をつかわし、冊封（戴冠式）を行



うなど、琉球文化に決定的な影響を与えている。

しかし他方では、中国との交戦の時もあった。中国の随書「琉球国伝」に記された琉球征伐や、元軍の二回にわたる来襲（一二九一年、一二九六年）、陽祥の引いる六千の軍勢と戦い琉球軍が戦勝している。

こうした、歴史的経緯からの沖縄の〈主体性〉を究明することも重要である。なぜならば、「危機的時代」あるいは「世がわりの時代」においてこそ、沖縄の〈主体性〉が問われ、その姿（本性）をはっきりとあらわすからである。

#### 〈属領人時代〉

島津が琉球征伐の理由をかかげて、琉球に侵攻したのが一六〇九年である。無条件降伏させられ、支配権と外交権をうばわれた時点から、沖縄の主体性は変容をとげる。自由に海外と交易もかなわず、島津の統制のもとにおかれた。沖縄人の自由闊達な気風、勇猛果敢な精神は重い鎖につながれ、支配権による支配する者と支配される者との関係が生じ、沖縄の主体性が、はじめて〈忍従〉を強いられ独立心が疎外されるという屈辱的な時代となる。中国との交易の利益はすべて島津に独占され、重税に泣かされ、奴隸といわれないまでも薩摩の属領人になされたのである。沖縄の主体性が、苦悩の内に屈折していく時代で、推察するに「テীগ主義」（どうでもい）が芽を出すのもこの頃からではなからうか。

文化問題では、そのころ沖縄の歴史書『中山世鑑』が出され、その中の「日琉同祖論」である。沖縄人と日本人の祖先は同じであると説き、日本文化を奨励したのである。これまでの中国との関係を重視していた人々から、当然のことながら反駁があったらう。それが後に、日本文化派Ⅱ親日派Ⅱ

開化党Ⅱ藩庁の役人・一般士族等と、中国文化派Ⅱ親清朝派Ⅱ頑固党Ⅱ領地を持つ貴族・士族との対決に尾を引いて「琉球処分」となっていくのである。一方、日琉同祖論は、天皇制国家の皇民たることに一脈通ずる根拠を与えたことにもなるのではないかと私は推察するのである。

#### 〈第一県民時代〉

「ヤマト世」の時代は、沖縄の主体性、文化にとって一つの危機を迎える。本土政府が徹底して〈日本文化〉をおしすすめていく時代であり、沖縄内部においても〈日本人化〉をおしすすめていく勢力が強くなっていく。国外向けには、琉球国を日本の帰属国とし、中国から切り離しをはかり、国内的には「琉球処分」を行ない、てこずったあぐく政府は、松田処分官と軍隊をくり出し廃藩置県を断行したのである。

大和世になることによって、いよいよ日本国の一県になり、外国への自由貿易の時代は事実上幕を下ろし、沖縄の鎖国がはじまるのである。自由貿易は密貿易になり、「犯罪行為」とみなされ処罰の対象になった。出国の権限が、はるか中央政府ににぎられ、お伺いを立てることになったのである。

しかも、処分後の沖縄県に対する本土政府の政策は、〈沖縄人〉を〈日本人〉化するために文化政策を持ち出してくる。それは「同化政策」と呼ばれているもので、沖縄の独自の文化（本土からすれば異文化）を全面的に排除し、大和文化に同化させるといふ文化的同化政策をとったのである。そのことを通して〈日本人〉にする政策であった。そのために、ヤマト文化は高尚で、沖縄文化は低俗だとする文化的差別を生み出すと同時に、沖縄文化を卑俗することによって〈劣等民族〉、劣等意識を植え付ける結果に

なったのである。

その象徴的な例が〈方言撲滅運動＝標準語励行〉であり、それが後に「方言論争」へと展開していくのである。

天皇制国家・軍国主義戦時体制下になると、標準語励行は、「標準語励行県民運動要項」となってあらわれる。

曰く、「……標準語励行ノ必要ナル事ハ今更喋々ノ要ナシ。全県民ガ普ク之ヲ使用スル場合ノ福利ト光明トハ真ニ偉大ナルモノアルヲ確信ス。時局重大ノ際ニ挙県一致標準語励行ノ大運動ヲ振起スルコトハ国民精神総動員ノ一運動トシテ意義深キモノアリ。仍テ各般ノ施設ヲ講シ之カ徹底ヲ期セントスル所以ナリ。」<sup>(12)</sup>となるのである。

そして学校教育という機関を通して、皇民化教育＝標準語励行＝皇語教育を行ったのである。そのさい「方言札」を作り、自分のシマの方言（琉球語）を使用すると、処罰されるというまったく呆れたことを行ったのである。その名残が、戦後の私（筆者）たちの教育にも波及していたから、その徹底ぶりのすごさがうかがえる。

方言論争の中心的人物であった柳宗悦（日本民芸協会）が、沖縄県知事に送った次の言葉は、沖縄の心をよくつたえている。

琉球にとって何が今一番必要であるか。私は再び云ふ。琉球文化への再認識である。此の島嶼が保有する豊富なる文化財への認識である。一言以て之を尽せば琉球への尊敬である。此の敬念なくして如何に琉球の窮乏を救ふとも、琉球人の精神を振興せしむることは出来ない。

……長い間県民が姑息囚循の誇りを勞けたのは、此の国の有つ文化価値を深く認識し、それに敬念を抱く者が乏しかつたのに因るのではなから

うか。沖縄県人をして沖縄人たることに誇りを感じずる気概と自覚とを与へることこそ、此の国への最大の贈物ではないだろうか。長官は凡ての日本人をして琉球の存在を尊敬せしめる念慮を植ゑつける悦ばしい任務を誰よりも多く背負うているのである。かかる長官の許にこそ始めて琉球は復活の歓喜を味ふであらう。<sup>(13)</sup>

#### 〈殖民的時代〉

しかし、時の長官（知事）は、その反対の道を歩んだのである。結果、沖縄の主体性は政治的にも文化的にも圧力を受け、その自由意志はねじまげられていくのである。

「アメリカ世」の時代はどうかというと、日本の同化政策とは正反対に、柳宗悦の提言通りの文化政策を米占領軍が実行したのであるから皮肉な話である。「身内にいじめられ、よその（他国者）にいたわられる」という奇妙なところから出発している。アメリカ軍政府は、「宣撫政策（工作）」として、たくみに沖縄文化尊重政策をうち出したのである。

アメリカ軍は沖縄を占領するにあたって、以前から周到な軍政の準備をすすめていた。米海軍省作戦本部軍政課は、一九四四年十一月『琉球列島民政の手引』を出している。それは本文だけでも二八八頁におよぶもので、その内容は、「沖縄の歴史的背景や民俗・習慣・祭礼・政治・教育・社会・経済・産業の実情が要約されているうえ、それぞれの分野の指導者の住所・氏名までが漏れなく記載されている。さらに地方農村生活の様態、福祉・財政・金融の状態、新聞・放送の実情から食糧事情、鉱産物資源の状況、あるいは林業、建築、労働人口の推移、雇用関係にいたるまで逐一分析さ

れている。しかも、ときに古い歴史にさかのぼって論及されている<sup>(14)</sup>。

一方、米海軍省作戦本部は別に『琉球列島の沖縄——日本の少数集団』という文書も用意していた。この文書は三つの部分から成り、「第一部では日本における沖縄の歴史的位置づけをなしている。第二部ではハワイの沖縄出身者たちの過去と現状（一九四三年当時）を社会心理学的側面から明らかにしている。第三部では、沖縄人と沖縄社会の特質を解説するとともに、それらを日本が内包している負の要因とみなして今後の戦争でいかに利用しうるかといった心理作戦上の戦術が具体的に語られている。一口に言えば、日本と沖縄間に介在する亀裂（cleavage）を十二分に利用することを提言しているのである。具体的には、日本政府が、往古から沖縄を政治的にも経済的にも圧迫してきたこと。そして「内地人」が日本内部においてだけでなく、ハワイ、南米、南洋など日本人社会のあるところではどこでも、『沖縄人は日本人ではない』として差別的処遇をなし、軽侮の対象にしてきた事例が列挙されている。一方、沖縄人がこうした日本政府や『内地人』による不当な処遇にたいし、内心根強い反感をもっていること<sup>(15)</sup>を指摘している。その中には、明治二〇年代から大正の初期にかけて鹿児島と沖縄に住み、自らつぶさに日本と沖縄との関係を観察したH・B・シュワルツが、一九〇八年に日本の沖縄にたいする同化政策の失敗を手きびしく批判した文章が引用されているという。

沖縄占領後は、こうした周到な計画に従って、米軍は〈沖縄諮詢会〉〈沖縄軍政府〉〈沖縄民政府〉等を設立し、その中に「文化部」を設置し、「民心の安定」「社会秩序の回復」をめざし、文化活動を展開していくのである。対住民施策に宣撫政策が重視され、それを「文化部」を通じて宣撫

的文化政策をうち出したことをとってみても、沖縄問題は文化問題であることを如実に物語っている。

アメリカは、占領政策をすすめるにあたって、第一線級の学者を軍政に送り出している。ほとんどの者が人類学者で、学問的にアジアに明るい学者ばかりである。とりわけ「文化部」部長のハンナ小佐は学者将校のひとりで、焼け残った文化財を収集し博物館をつくり、伝統芸能の専門家や沖縄芝居の俳優を集め「芸能連盟」を結成し、各地域で「巡回演芸会」を開催、文化運動を展開したのである。

「沖縄文化にかえれ」といわんばかりの積極的文化政策は、沖縄の〈主体性〉を呼び戻すのに充分だった。たちまち沖縄の心に火がついて「村おこし運動」のエネルギーに点火し、ひいては〈沖縄文化のルネッサンス〉と呼ばれる時期をつくり出していくのである。

一方軍政は、いち早く住民に〈参政権〉を与え、民主主義の啓蒙に乗り出した。はじめて婦人参政権も付与されたのである。

このように、天下り式の民主主義が、DDTのように散布され、いやがうえにも沖縄住民は民主主義を身につけることになった。そのことが、沖縄解放へと発展していくのである。

もともと米軍政は、沖縄を極東の軍事基地にすることをねらっていたので、そのことが本質的に沖縄の平和・人権・民主主義にとって矛盾をまねく結果になった。「異民族支配」「人権擁護」「土地闘争」「祖国復帰運動」「米国植民地化からの沖縄解放」等の住民運動が発火し、結局アメリカは自らまいた民主主義によって責めを負うことになるのである。この時点から、沖縄の主体性は沖縄の解放へと向うのである。

しかし、なんといつても「アメリカ世に逆様だ」とまごつかせるほど、カルチュラル・ショックを与えたことは確実である。東洋文化は自らの足で運んだが、アメリカ文化は、米軍人と一緒にストリートに入ってきた。よきにつけ、あしきにつけ衝撃を受けたことにはまちがいない。

高等な文化、ドロドロした文化を、直接米軍人という兵隊を通して受け取って育った私などの外国イメージと、本土の人の外国イメージに大きな差があることを、本土に来てわかったことである。舶来品に目の色を変え、外人に憧れる傾向の強度の高いのは本土の人たちである。前述した増田義郎の言うように、日本は外国からいいものだけを輸入した結果だろう。外国のいいものを見すぎて、外人コンプレクスをもつようになったのではないか。そのことも含めて、アメリカ文化とパーソナリティー・沖縄の主体性を究明する必要がある。

#### 〈第二県民時代〉

沖縄返還・本土復帰により、琉球政府時代から沖縄県政へと変わり、第二沖縄県民時代を迎える。沖縄の主体性にとって現在進行形なので、評価するのに時間を要するが、あえて大きな変化の相をみるならば、①本土系列化の問題、②中央政府の受け皿的傾向、③文化の観光産業化などである。それらとの関係の中で、今沖縄の主体性が問われている。

以上文化問題史的に概観したが、それぞれの時代を、文化とパーソナリティーの視点から詳細に研究する必要があるだろう。

#### (2) 沖縄人の〈沖縄意識〉の研究

古代から沖縄は大和(日本本土)とは別個の歴史を歩んできた。十五世紀に入ると、沖縄は「琉球王国」という独自の国家を成立させ、琉球文化

を開放させ沖縄の個性Ⅱ主体性を発揮した。

そうした歴史的過程を通過しただけに、日本社会に組み込まれ日本人になつていながらもかわらず、日本社会を相対化してとらえる強い意識を沖縄人はもっている。たとえば、自己を〈沖縄・沖縄人〉としてとらえ、本土社会・本土の人を〈大和・大和人〉として区別する傾向がある。前述したように、私の中にも〈沖縄人〉〈大和人〉部分を意識的に区別する考えがひそんでいる。

沖縄県民にとって、「沖縄」は「一個の完結的な世界として強く意識されること。それは、自己の地域が一個の独自の個体として歴史的・文化的に形成されたことの結果であるが、しばしば『沖縄ナショナルイズム』と形容される『母語』観念がそれにあたる。この観念は『ウチナンチュ』の意識の発生源であり、本土やハワイ・南米など県外にいる県出身者の間によくみられる強い帰属意識の源にもなっている」<sup>(16)</sup>。

沖縄文化に強く見い出せる〈祖先志向性〉〈原郷意識〉も、その点から究明してみることも肝要であろう。

もう一点は、地理的狀況・風土からの考察である。沖縄は、七〇に近い島々からなる群島であり、沖縄本島(那覇市所在)を中心とした、いわばミニ国家的である。それは、歴史的・文化的(文化圏)影響もあるが、地理的關係は無視できない。日本の一県でありながら、日本全体を小さくした縮図的なミニ国家的でもある。その意味で、地理や風土からの意識の研究も重要である。

#### (3) 個人・共同体の行動に関する研究

沖縄の歴史の中で、とりわけ文化問題の狭間で生きぬいた、代表的な人

物の行動とそのパーソナリティーに関する研究。

さらには、文化問題によって部落・一族・一門といった共同体のといった行動と意識の研究。松本建一も指摘するように、「共同体は、その時代時代の体制によって、その生存のかたちをかえながらも、それじたいの生存論理によって生命を保ってきた。これは、権力に従いつつも抗がい、抗がいつつも流されることによって時代を生き抜く民衆の生存論理と、きわめてよく似ている。これはしかし、当然のことなのである。なぜなら、共同体とは、民衆がひとりのみでは生き抜けぬと考えてつくりあげた組織だからだ。いわば共同体のありようは、民衆の生きざまの集積なのである」<sup>(17)</sup>。このような共同体の生きざま(性格)を文化問題との関連で究明する必要がある。

(4) 民俗学的手法による研究

沖繩の文化内容からのパーソナリティー研究。特に次の文化内容の調査研究が重要である。

- ①有形文化——住居、家具、衣服、食品、生産用具、その他
- ②行動文化——年中行事、祭礼、競技、娯楽、村組織、労働、社交、出産や死亡、婚姻、その他
- ③言語文化——民謡、昔話、伝説、ことわざ、など、その他
- ④心意文化——祖霊信仰、民間医療、迷信、妖怪(マブイ)、神事、その他
- ⑤風 土——自然、地理、気候、その他

六、おわりに

「沖繩人間学」は、私の〈自己発想〉から生まれたものである。したがっ

て、学問的にたえうるかは疑問とするところであるが、しかし、常に沖繩の主体性・アイデンティティの確立を志向する私の問題意識から生まれたものである。

私をくぐりぬけて沖繩の主体性をどうとらえるかという自己課題は、学問的研究というよりむしろ文学や詩、および直観や肌ざわりを通して把握するものなのかもしれない。あの岡本太郎のように<sup>(18)</sup>。

しかし、あえて人間学にしたのは(へ生の文化哲学)の意味をもこめたものにしかたからである。こういうことは、私などのおよぶところではないが、仮説的に提起したのである。いってみれば、これは私(主体)の沖繩学事始めである。

注

- (1) 北嘉佑典「沖繩のわらべうたと音楽教育」『音楽教育研究』一九七八年 No.15 音楽之友社、一〇〇頁。
- (2) 下野敏見『ヤマト文化と琉球文化』PHP研究所 一九八六年。
- (3) 小野重朗『神々の原郷—南島の基層文化—』法政大学出版 一九七七年。
- (4) 源了圓『文化と人間形成』第一法規 昭和五七年 六頁。
- (5) 源了圓『同書』 七頁。
- (6) 宮良高弘「沖繩文化研究の成果」『現代のエスプリー—沖繩の伝統文化—』No.72、至文堂 昭和四八年 一五頁。
- (7) 宮良高弘「同論文」三〇頁。
- (8) 大江健三郎「文化問題としての沖繩」『沖繩文化の古層を考える』法政大学出版 一九八六年 三四—三五頁。
- (9) 大城立裕『私の沖繩教育論』若夏社 昭和五五年 一六一—一六二頁。
- (10) 田中克彦『ことばと国家』岩波新書 一九八一年 一三頁。
- (11) 石田英一郎・上山春平監修『Energy』第四巻第四号・エッソ・スタンダード石油(株)弘報部 昭和四二年。

- (12) 谷川健一編『わが沖縄・方言論争』木耳社 昭和四五年 一四八頁。
- (13) 谷川健一『同書』一四三頁。
- (14) 大田昌秀「占領下の沖縄」『岩波講座・日本の歴史』二三卷 岩波書店 一九七七年 二九七頁。
- (15) 大田昌秀「同論文」二九七～二九八頁。
- (16) 沖縄地域科学研究所編『沖縄の県民像』ひるぎ社 一九八五年 二〇頁。
- (17) 松本健一『共同体の論理』第三文明社 一九七八年 二〇頁。
- (18) 岡本太郎『沖縄文化論』中央公論社 昭和四七年。